

若の里 現役振り返る自伝 「たたき上げ」好評

実直な生き方に共感

増刷が決まった元関脇・若の里の自伝「たたき上げ」の表紙



し、西岩親方は「自分のすべてが載っている。一人でも多くの方々に読んでいただければうれしい」と話しているという。

昨年9月に引退した大相撲元関脇・若の里の西岩親方(40)＝本名・古川忍、弘前市出身＝が、今年5月の引退相撲に合わせ現役時代を振り返って著した自伝本「たたき上げ」が好評を博し、版元の大空出版(東京都千代田区)は8日までに増刷を決めた。同社編集部は「青森県に伝わる相撲精神を体現した実直な取り口と生き方が共感と呼んでいる」と評

見ず知らずの初老の男性から「若の里関は立ち会いは常に真っ向勝負で絶対に変化しないところが好きだ」と言われて、「二度と立ち会いは変わらない」と誓った。その男性に「会えるものなら『あなたの一言で私は信念を貫いた』と話してみたい」との思いを本書で吐露している。

若の里のしこ名は本県出身の両横綱、初代若乃花と師匠・隆の里に由来する。この名にふさわしく、15歳の初土俵から39歳で引退するまでけれんみのない取り口を身上とした。若の里が足のけがから「生涯一度だけ立ち会いで変わった」のが1999年7月場所11日目の土佐ノ海戦。師匠に叱られ、落ち込んで出かけたすし屋で、

事改善に全力で取り組んだのも「すべて一日も長く力士でいたい」一心だった。

引退が頭にちらつく晩年。揺れる思いを踏みとどまらせたのが、幕下で角界を去った先輩の「十両に落ちても相撲を取ってくれ」の言葉。10人入門すれば1人しか関取になれない現実に腹を固めた。

けがの治療では看護師の仕事ぶりから「付け人への感謝の心」を学んだ。また、若の里の付け人であった輝関とのやりとりは、ちばてつや作の人気相撲漫画「のたり松太郎」に描かれた場面を思い起こさせ、涙と笑いなしには読めない。

西岩親方はエピソードで「力士では関脇どまりだが、指導者として横綱を目指す」と締めくくっている。

四六判223ページで1200円(税別)。

【松山彦蔵】